京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

No.17 2008.12

（目次）

● 巻頭言
教育学部60周年に向かって ・・・・・・・・・・・・・・・・ 副研究科長　子安増生 ・・・・・・・・・・・ 2
● 研究ノート
教員から「臨床心理実践の、実践のための、実践による研究」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・臨床心理実践学講座　教授　伊藤良子 ・・・・・・・・・・・ 3
院生から ・・・・・・・・・・・比較教育政策学講座　博士後期課程１年　馬場智子 ・・・・・・・・・・・ 3
● グローバルCOEの人材育成活動
・・・・・・・・・・・・・・・・ 教育認知心理学講座　教授　拠点リーダー　子安増生 ・・・・・・・・・・・ 4
● 大学院教育改革支援プログラムから ・・大学院GP関連　助教　竹中菜苗 ・・・・・・・・・・・ 4
● 教育実践コラボレーション・センターから
・・・・・・・・・・・・・・・・ コラボレーション・センター関連　助教　安川由貴子 ・・・・・・・・・・・ 5
● 社会人研究生から ・・・・・・・・・比較教育政策学講座　研究生　原田直樹 ・・・・・・・・・・・ 5
● 臨床教育実践研究センターから
・・・・・・・・・・・・・・ 心理臨床学講座　教授　心理教育相談室室長　桑原知子 ・・・・・・・・・・・ 6
● 事務室から ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 事務長　千代進一 ・・・・・・・・・・・ 6
● 図書室から
とっても便利な文献管理ツール RefWorks ・・・・・・・・・・・・ 図書掛　山本健太郎 ・・・・・・・・・・・ 7
● 留学生から
嘘も方便 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・教育学講座　研究生　ニルス・ファン・ステンパール ・・・・・・・ 7
● 諸記録 ・・ 8～9
①入試結果 ②学位授与件数 ③人事異動 ④寄附金受入 ⑤科学研究費補助金
⑥オープンキャンパス2008開催
● 諸報
新任教員、事務員紹介 ・・ 10

巻頭言

教育学部60周年に向かって

副研究科長　子安増生

洛北の秋が深まり行き、2008年度の後期セメスターも順調に推移しています。

まず10月1日に、この3月まで長年教室として使用されてきた第二講義室が「ラウンジ」にリニューアルしてオープンし、毎日学生・院生の皆さんで賑わっています。私が在外研究で1年間ほど滞在したイギリスのオックスフォード大学には、各カレッジ（学寮）に「コモンルーム」というものがあり、教員や院生がお昼休み、ティータイム、夕刻などにゆっくり座って話し込んだり、活発な議論をしたりしていました。欧米の大学では、こういったコモンルームがあるのが普通の姿です。わが部局も念願のラウンジがようやく完成し、古めかしい言葉でいう「談論風発」の雰囲気のもと、豊かなコミュニケーションの場として活用されることを願っています。

また10月9日、今年度初めてのことですが、教育学研究科主催の「大学院進学説明会」を実施いたしました。説明会の内容は、①大学院のコースとカリキュラム、②奨学金、日本学術振興会、グローバルCOEや大学院GPなどによる院生支援、③入試概要、④修了後の進路、⑤教員からのメッセージなどです。「教育学研究科に進学を希望している方、興味のある方は、学年・学部・学内外を問わず参加可」と案内しましたところ、幸いにも予想をはるかに上回る参加者があり、会場の第一講義室（総合研究2号館）だけではとても収容しきれず、第二講義室も開放して、ビデオ会議形式で実施されました。このような熱気が本研究科の一層の活性化につながるようにしていきたいと考えています。

さて、来年（2009年）は、教育学部の「創設60周年」の年にあたります。人間でいえば「還暦」であり、大変おめでたい年です。教育学部の源流は、京都帝国大学時代の1906年（明治39年）9月に文科大学（現・文学部）の哲学科に設置された「教育学教授法講座」にありますが、新制京都大学が発足した1949年5月31日が「教育学部」としての誕生日です。その後、1998年4月には、いわゆる大学院重点化による学部・研究科組織の再編が行われました。現在の研究科講座の基本的構成（基幹8講座、協力2講座）は、この大学院重点化のときからのものです。また、2004年4月には、国立大学法人化により「国立大学法人京都大学」の一構成部局となり、同時期に臨床実践指導学講座が設置され、今日に至っています。

教育学部のアニヴァーサリーを振り返りますと、人間でいえば成人祝いに当たる20周年の1969年は日本全国の大学でいわゆる大学紛争が巻き起こり、京大を取り巻く雰囲気もとてもお祝いどころではありませんでしたが、1989年の40周年記念事業は大々的に執り行われ、同窓会会員からのご寄付によって、『京都大学教育学部四十年記念誌』をはじめ各種事業が行われました。その後、教育学部同窓会（京友会）によって、大学院生の研究費、留学生の国際賞などさまざまな助成が行われています。

今回の60周年では、40周年以後の教育学部・教育学研究科の発展についてまとめた『京都大学教育学部六十年史（1989～2009）』の編集作業が現在着々と進展しています。また、60周年記念祝賀会も開催の準備が進められています。

私個人のことを申し上げますと、教育学部の誕生から1年半ほど後に生まれ、20周年の1969年は京都大学教育学部に入学して大学紛争に直面した年、40周年の1989年は教育学部教官（当時の教育心理学講座の助教授）として赴任した翌年でした。まさに教育学部の一歩後を追って私自身が成長してきたわけですが、40周年の時にご在職であった先生方も今はすべてご退官あるいはご退職されましたので、年月の経過というものを痛感しております。

上述の2004年の国立大学法人化は、「大学の教育研究に対する国民の要請にこたえるとともに、我が国の高等教育及び学術研究の水準の向上と均衡ある発展を図るため」ということが国立大学法人法第一条にうたわれており、国立大学の教育研究活動の活性化という大きな目的があるはずですが、現実には6年を単位とする中期目標・中期計画の年次評価と、7年に一度の認証評価という大学評価作業などに日々追われていて、ロング・レインジの長期計画にはなかなか目を向ける余裕がない状態です。間もなく60周年の区切りを迎えるこの時期こそ、構成員の皆さんが教育学部・教育学研究科の未来についてじっくりと考えてみるいい機会ではないかと思います。

研究ノート

教員から

臨床心理実践の、実践のための、実践による研究

臨床心理実践学講座　教授　伊藤良子

今年は、黒人米大統領の誕生という感銘深い「奇跡」に出合うことができました。この歴史的な出来事を記念すべくリンカーンの成句を用いることを許して頂くならば、私の研究は「臨床心理実践の、実践のための、実践による研究」だと考えております。その始まりは、1970年代初頭の自閉症の幼児たちとの出会いでした。私は、他者と視線を合致させずモノをのみ見続けていた彼らの生き様を、全くの孤立無援状態にあって、一人でこの世界の時間・空間を懸命に把握しようとしているあり方と受け取りました。毎週、繰り返されたこの出会いから、他者である私の身体を見るという関係性が生じ、それを基盤に自己の身体の対象化につながる「鏡像遊び」(伊藤)が、彼ら自身によって創出され、そこに「私」という存在が生成されて、「わたし」という言葉も生まれてきたのです。誠に驚くべきことでした。

その後今日に至るまで、私は、様々な困難や重篤な心身の病をかかえている子どもや成人の心理療法において、「私」の生成の原初的な次元における他者の存在の欠くべからざる重要性を示す事実に出合ってきました。出合ったと表現したのは、人間の意図を遥かに超えた事象がそこに起こってきたからです。心理療法の場でのセラピストの本質的あり方とは、「欲望せず、理解せず、記憶せず」(ビオン)に彼らとともにあることなのですが、そこに、子どもであっても成人であっても自らの困難と主体的に対峙する過程が現れ出てきます。しかし、それは、一般常識では理解し難い現象であります。したがって、このような濃密かつ長期にわたる実践から与えられた、まさしく「臨床の知」を正確に記し、そのままの事実を社会に伝えることが、研究者としての私の努めであろうと痛感して参りました。

今年度末には、教室として、京大心理臨床シリーズの7～9巻『発達障害と心理臨床』『心と身体の心理臨床』『心理臨床における関係性と身体』等、上記のような生物学的次元へのアプローチに関する書が順次刊行される予定です。ご一読賜りましたら幸甚に存じます。

院生から

比較教育政策学講座　博士後期課程1年　馬場智子

私は現在、価値教育について研究しています。学部時代は福祉、特に障害のある方の社会参加促進について学んでいました。その際に一番大事だと気付いたのは、一人ひとりが、障害のある方を一くくりに「かわいそう・守らなくてはいけない」という目でみるのではなく、個々人の人柄や関心に第一に目を向けるという意識でした。また、そういったまなざしは、知識だけで身につくものではないのですが、かといって自然に身につくものでもない、日々の生活と学校などでの学びを通じ、生涯をかけて育成されていくものだということも知りました。

子どもが学校で教わることというのは色々あります。知識や技能ももちろん大切ですが、学部時代の研究とフィールドでの経験から、人と接するときの態度、価値判断というのも同じくらい大切だと考えるようになり、それらに関わる教育を研究したくてこのテーマを選びました。その際、日本の教育問題を考えるにあたって、一国の状況だけを見るのではなく、もう一国からの視点を持って見ることが必要だと感じ、比較教育学という分野を選びました。

最近は、フィールドで得た研究成果をどうすれば教育現場に還元できるのか、ということを思うようになりました。一言で還元といっても、直接指導に役立つだけでなく色々あるはずなのですが、具体的なビジョンがなかなか…というところです。今後は、自分の研究をさらに深めるとともに、そういった還元方法にも目を向けていきたいです。

グローバルCOEの人材育成活動

教育認知心理学講座　教授、拠点リーダー　子安増生

教育学研究科のグローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」は、大学院教育の活性化のため、研究教育の「国際化」と「人材育成」を2つの柱にして平成19年度に企画・採択され、5年間のプロジェクトの2年目に入りました（http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/）。

今回は、人材育成に関する4つの主要事業について、以下にご報告します。

（1）「海外留学資金」は、大学院博士課程在籍の院生を対象に、申請額60万円以内の条件で留学資金を公募し、平成19年度は5人、20年度は9人が採択され、海外の研究機関に留学して研究活動をしています。

（2）「院生養成プログラム研究費」は、博士課程の院生を対象に研究を支援するものです。19年度は、「支給額30万円以内または50万円以内（国際学会発表を含む場合）」で公募し、14件を採択しました。20年度は、「支給額は1件30万円以内。ただし、外国学会で発表を行う場合、その採択の書類がある場合は、航空運賃実費分（上限15万円）を加えた申請が可能」として公募し、20件を採択しました。

（3）「研究開発コロキアム」は、博士課程の院生が代表者となって企画する、専攻や講座・専修の壁を越えた優れた共同研究計画に対して資金（1件50万円以内）を与え、修士課程院生・学部学生を受講者とする授業として研究を実施するものです。19年度は8件、20年度は15件を採択しました。

（4）20年度から、大学院修士課程1年生を主要な対象に（上級学年も任意参加が可能）、研究室相互訪問など心理学・教育学の大学院生が共同して参画するExchanging　Laboratory Program（EXラボ）を開始し、主に9月に5プログラムを実施しました。参加者はのべ45人、うち修士課程1年生はその約7割にあたる38人が参加しました。

以上のように、本拠点は人材育成の活動を着実に実施しています。院生の皆さんは、このような機会を上手に活用して下さい。

大学院教育改革支援プログラム（大学院GP）から

大学院GP関連　助教　竹中菜苗

教育学研究科は実践と研究の密接な連携をもとにした研究および教育を重視しています。多様性や複雑さが増す現代社会において実践と研究の有機的な繋がりを保つことは決して容易ではなく、同時にますます重要にもなっています。このことはその社会に生きる個々人に目を向けてみても同様で、人間にかかわる学問に携わる私たちは心という目には見えないものに向かいあい、また、それを研究の対象として捉えていかなくてはなりません。そこでは生身の人間の真実から切り離されることのない研究が求められます。大学院GP「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成（京大型臨床の知創出プログラム）」では、平成19年度より修士課程を含む大学院生の具体的かつ創造的な研究遂行能力の育成と実践的な能力の高度化を目指し、カリキュラムの見直しおよび大学院生の研究・実践活動支援や講演会を実施しています。平成20年度は新科目「京大型臨床論」の開講、国内外から優れた専門家・実践家を招聘してのシンポジウムや講演会などを通じて、大学院生が臨床の知を創出する専門家のあり方を直接的に学ぶ機会を設けました。それに加えて大学院生が主体的に創造的な研究を進め、その成果を広く発信する能力の育成を目指し、前年度に引き続き大学院生がみずからフィールドを開拓しておこなう研究開発コロキアム、国内外における学会発表支援、外国語論文作成にかかわる支援なども進めています。

学位論文作成に至る教育プログラムの実質化も本取り組みの目標とするところであり、今後はこれまでの活動を通じて大学院生が体得した実践の技量および研究遂行能力を生かし、課程博士の学位取得者の増加が望まれます。また、より包括的な視点から「京大型臨床の知創出プログラム」を明確に策定し、言葉で捉えることの難しい「臨床の知」についても具体的な答えを示していきたく思っています。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

教育実践コラボレーション・センターから

コラボレーション・センター関連　助教　安川由貴子

2007年4月に京都大学大学院教育学研究科の「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」を推進するために「教育実践コラボレーション・センター」が設立されて、もうすぐ2年になろうとしています。同センターの活動も、教育学研究科内の教員・学生の方々にも次第に定着してきたような気がします。

今年度は、センター企画として、2008年7月には早稲田大学より安彦忠彦先生、中国・中央教育科学研究所より高峡先生、ソウル大学より白淳根先生をお招きし、公開シンポジウム「日中韓の教育課程・教育評価改革の動向」を開催し、盛会に終えました。引き続き、「国際教育研究フロンティア」として高峡先生より講義が行われ、中国の教育課程についての認識をさらに深めることができました。また、現場の問題について考える機会の一環として、「いのちの学習」を中心とした実践で知られる金森俊朗先生より、お話を伺う研究会をもちました。今年度は、2009年2月に行われる臨床心理実践研究センター主催の「リカレント教育講座」にセンターも共催で関わることになっています。

また、アクション・プログラムの3つの柱である、「学校教育改善ユニット」（京都市立高倉小学校、寝屋川市立田井小学校、滋賀県立膳所高等学校での全校的で継続的な授業研究とカリキュラム開発や全国スクールリーダー育成研修(E.FORUM)の取り組み）、「新しい教育関係ユニット」（不登校の子どもたちのための学校である京都市立洛風中学校を中心として、心理臨床学や臨床教育学の視点から学校運営を考える取り組み）、「教育空間創造ユニット」（京都府相楽郡南山城村の野殿・童仙房地区のコミュニティ全体を対象とした新しい教育空間創出の取り組み）における活動も、もともと同センター立ち上げ前より始まっている研究であることもあり、継続面や内容面でも広がりと深みが出てきて充実してきています。また、「研究開発コロキアム」も上記のユニットをベースに3件採択されており、大学院生もまた別の角度から主体的に関わっています。

さらに、国際関係では、先述のシンポジウム以外にも、11月に7名の先生方が訪中し、中国・中央教育科学研究所との間で進んでいる共同著作執筆の話し合いや、算数・数学のカリキュラム比較の研究会、小学校訪問が行われます。北京師範大学との学術交流では、12月に教員・院生が11名訪中し、高等教育に関する国際合同シンポジウムⅠ「現代日本における高等教育」、Ⅱ「学生の研究と生活:現状と課題」が実施されます。また、大塚雄作先生（高等教育研究開発推進センター）より、北京師範大学で「高等教育論―日本の大学教育の課題と評価」の講義が行われます。

このように、センターの活動の幅が広がるとともに、そこに関わる学生・院生の層も広がってきています。また、学校現場の教員や学生の方々は、毎年メンバーが一部変わっていくことになりますが、それによって活動の体制や中身も微妙に変化していくことは、フィールド研究の難しさでもあり、同時に面白さをも表しているように思います。今後、更なるコラボレーション・センターの発展を願いつつ、一緒に関わっていきたいと思います。

社会人研究生から

比較教育政策学講座　研究生　原田直樹

私は静岡県の県立高校の教員です。教育委員会の派遣により、この4月から教育学研究科教育行政学研究室に研究生としてお世話になっています。現在全国で導入が進む教員評価制度を主たる研究テーマに据え、その実効性のある活用方法を検討するとともに、教員の資質向上並びに学校現場の活性化に結びつく手法について研究しています。昨今様々な教育問題がメディア等で取り沙汰されていますが、自身のこれまでの15年間の教員生活の中で感じていた疑問・課題についてじっくり考えてみようと思い、このようなテーマ設定をしました。

学校というところは、校長・教頭というわずかの管理職がいるだけで他の教員はすべて身分的にはフラットな鍋蓋型の組織構造をしています。その一方で、教員同士の協働性はそれほど強いわけでもなく（特に高校では教科や分掌間の連携・結びつきの弱さを感じます）、個々の教員が淡々と自分のテリトリーの業務をこなしているのが大多数の学校の現状であるといえます。そんな風土に疑問を感じながら、教員同士がもっと連携し合い、組織として機能していくことで、学校は変わるのではないか、そのためには何が必要なのか、そういったことを常日頃から考えていました。生徒が活き活きと楽しい学校生活を送るための条件のひとつに、教員自らが活き活きと（仕事を）楽しめている学校（職場）であることが挙げられると考えています。今回の研究を通してそのような学校（職場）を築いていくための何らかのヒントが見つかればと思っています。

今年の2月中旬に派遣の話を頂いてから京都に来るまでの間は、ただ慌ただしく時間が過ぎ去るだけで、研究についてはほとんど考えることもなかったため、当初は何をどうすればよいのかわからずに戸惑うことばかりでした。受講させていただいた授業や様々な文献に触れる中で、これまでの教員生活を通しての不勉強さを痛感しながらも多くの知識を得ることができました。また、研究や授業等を通じて多くの学生と意見を交わす中で、教育課題に取り組んでいる彼らの熱意も伝わって来て、大変刺激を受けています。そして何より、この1年の間に大学内外で多くの方々と知り合うことができたことが大きな財産となっています。現場にいるだけでは知り合うことのなかった方々から非常に多くのことを学ぶことができました。そんな京都大学での生活も8ヶ月が過ぎ、いよいよ自身の研究もまとめの段階に入ってしまいました。このような機会を与えられたことに感謝しつつ、残りわずかとなった京都での生活を実りあるものにするために、有意義に過ごしていきたいと思います。

臨床教育実践研究センター「心理教育相談室」から

心理臨床学講座　教授、心理教育相談室室長　桑　原　知　子

1980年に、国立大学として初めて有料の大学附属施設として文部科学省に認可された「心理教育相談室」は、その後も広く一般市民のこころの諸問題に関わる相談活動を続けてきました。2007年度の延べ面接回数は4750件にのぼり、相談室は着実な歩みを続けています。最近では,誰しもが抱える可能性のある「こころ」の悩み、家族をめぐる相談,こどもにかかわる問題など、多くの来談があり、近年ますますその社会的要請が強まっています。例えば、いじめや非行、不登校、さらには近年注目されている特別な支援を求められている発達障害のこどもやそうしたこどもを持つ保護者との面接も多くなっています。さらには、ひきこもりやうつ状態、成人の発達障害など、相談室では多様な問題に向き合っています。

当相談室は、本研究科臨床教育学専攻の心理臨床学領域に所属する大学院生がスタッフとなり、実践・研修・教育・研究などの活動に携わっています。相談室にかかわるスタッフの数は、90名にものぼります。

こうした、相談件数の増加の中、面接室や遊戯療法室の不足が顕著になり、施設面での充実が強く望まれてきました。

「心理教育相談室」は、1965年に心理学系の研究室が現在の本館へと移転した際に、地下に設けられました。その後、1984年には、現在博物館がある本館西向かいにあった「赤レンガ」に移動し、さらに1998年には現在の文学部東館に移転となりました。この間少しずつではありますが、拡充の試みがなされてきました。そして、本年度、再配置に伴い、再度相談室は移転することになりました。今回は、総合研究1号館に移ります。この建物は北門から近く、これまで構内で迷うことの多かった来談者にとって利便性が高まるものと期待されます。

最近は、対象となる問題が、複雑で、困難なものが多く、緊急性も高くなっています。こうした現代社会の状況に対応するために、相談活動をますます充実させ、相談室スタッフの専門的訓練・教育にも力を入れていきたく思っています。

こころの問題は社会を映す鏡です。当相談室は、社会と密接にかかわりあいながらその要請にこたえるとともに、学問的な基礎付けや研究を行うことで、今後もその役割を果たしていきたいと考えています。

事　務　室　か　ら

事務長　千　代　進　一

現在、耐震改修工事が構内の各所で行われておりますが、本学の耐震化推進方針（平成18年5月）では、平成18年調査時の耐震化率63%を、平成22年には93%に、平成27年には98%にとの目標が掲げられており、平成20年3月現在においては77%に達しております。本年度の補正予算で、吉田キャンパスでは、工学部1号館、6号館、土木工学教室本館、学生部の建物が耐震改修工事の予算が措置されることになり、耐震化率は80%を超えることになります。教育学部本館は昭和40年、41年の2期に分け建設され、その後、昭和55年に増築され、現在に至っておりますが、現行の建築基準では、耐震補強が必要な建物であります。ちなみに、教育学部本館の周辺では、法経北館と経済研究所が必要な建物です。教育学研究科は、吉田キャンパスの再配置計画において、総合研究1号館に940㎡、総合研究2号館に700㎡の配分を受け、教育学部本館4,060㎡と併せて3施設、計5,700㎡で教育研究活動を展開することになっております。

このような状況ですので、教育学部本館の耐震改修工事の予算措置がいつ行われても不思議ではない状況であります。なお、耐震改修工事は補強工事であり、基本的には増床は認められません。

耐震改修工事が予算措置されれば、かなりタイトなスケジュールで、基本設計等を施設・環境部と協議することになりますが、そのためには、建物内の再配置を含めた基本方針を決めておく必要があります。その中には、附属図書館との関係を含めた部局図書室のあり方、閲覧スペース、事務室、会議室、情報端末室や複写室の共通スペース、また実験室、教員研究室と院生室の配分計画など、これまでの経緯や既得権益にとらわれず、また講座の利害を超え、中・長期の教育学研究科の将来の発展を見据えた議論を重ねていただき、機能的で、安全、快適な施設にリニューアルされることを望んでおります。

また、耐震改修工事中は、一時避難をする必要がありますが、その場所の確保の問題、2回行わなければならない移転作業等、問題が山積しております。その間、教職員、院生の方々には、ご不便またご負担をおかけすることになりますが、ご協力をお願いするしかありません。

最後になりますが、このような大変な課題を残したままで、申し訳ありませんが、私は、21年3月に定年で退職いたします。3年間と短い期間でしたが、大変お世話になりました。

図書室から

とっても便利な文献管理ツール RefWorks

図書掛　山本健太郎

京都大学附属図書館電子情報掛が主催しているRefWorksの利用説明会に参加しました。今回、その便利な機能を紹介します。

RefWorksとはSUNMEDIA社が提供している『学術情報・研究成果の収集と管理、共有、情報発信を支援する』Webサービスです。主な機能を下記に説明します。

◎データベースの検索結果を電子ジャーナルで保存

Scopus, Web of Science, Ciniiなどの主要なデータベースの検索結果はもちろん、電子ジャーナル、Google scholarなどのWeb情報もRefWorksにインポート（とりこみ）することができます。RefWorksの容量は1アカウントで5GBあるので気にせずどんどんとりこめます。

◎インターネットで情報管理し、論文作成

京都大学が契約しているデータベースの検索結果をRefWorksに保存すると、インターネットが繋がる環境でさえあれば、どこでもそのレコードを利用できます。とりこんだレコードはフォルダを作って管理し、検索機能をもちいてRefworks内にある探したい情報へのアクセスも容易です。

◎参考文献の作成

参考文献の作成は非常に手間のかかる作業です。RefWorksを使って文献データを管理すれば、簡単に作成できます。投稿雑誌によって違う参考文献の書式も、Refworksがあらかじめ用意している雑誌リストを選択すると、そのスタイルで参考文献リストが作成できます。その雑誌リストに投稿雑誌がない場合などのために、参考文献スタイルは自分でも作成できます。

◎研究成果を世界に公開

RefWorksの目玉がこの公開機能です。RefWorksのRefshareという機能はフォルダにあるデータをウェブ公開させるものです。RefWorks契約者でなくてもこの公開データは閲覧することができ、参考文献リスト、教材用文献リスト、ファイル提供など講座内の研究テーマデータベースとして共同利用することができます。

以上が要約です。このような便利な機能をもつRefWorksが現在、無料トライアル期間中で、京都大学の構成員なら試行できます。附属図書館電子情報掛によれば、この無料トライアルの利用状況により、今後の導入を検討するということです。

興味をお持ちになった方は図書館機構http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/に資料検索、文献管理ツールとして、案内を掲載しているのでご覧ください。

21年1月末まで使用できますので、ぜひ、利用登録をしてたくさんの方に利用していただきたいと思っています。

留学生から

嘘も方便

教育学講座　研究生　ニルス・ファン・ステーンパール

江戸後期大阪の文人、田宮橘庵は、その随筆の『愚雑俎』に、次の豆知識を遺しました。「夏日など計らず耳に虫の入ことある。むつかしき術を求るに及ばず。虫の入らざる方の耳に指を入て塞げば、すぐに虫出るなり、と友人藤村氏かたられぬ。後にこころみるに果して其ごとし」。私は残念ながら、虫に好かれていないので、この話の真否を未だ確認出来ていませんが、後難を恐れずにいえば、人の耳に入るという大胆な行為に挑んだ虫は、実際には、その人がもう一方の耳に指を突っ込んでも、何の動揺もせず、平気で居られるでしょう。とすると、田宮橘庵の耳に入った虫は、一体何故そこから出たのでしょうか。思うにそれは、指を耳に入れると、きっとその虫が出る、というデタラメを信じた田宮橘庵が落着いていたからでしょう。逆にいえば、虫が耳に入った心細い現実に、パニック状態に陥れば、それは逆効果を及ぼすのみです。藤村氏が、友人なる田宮橘庵のおそらくパニック気味の性格を弁えて、「嘘も方便」と、この話をしたと私は思っています。

気が付けば、私はおそらく田宮橘庵と同じ立場にあります。去年ライデン大学で修士課程を修了した私は、今年の四月から京都大学で「孝子伝」や近世の庶民教化を研究しながら、来年度から博士後期課程への入学を志しています。浅学菲才の自分には、とんでもない話ですが、先生や研究室の仲間は、それでも励ましの言葉をしてくれます。励ましというより、本当はデタラメでしょう。しかしパニック気味の私は、その親切なデタラメのお陰で落着くことができ、その嘘が方便になるように頑張ろうという気持ちになっています。学問と虫に接するにあたっては、パニック状態に陥らないようにしてくれる仲間が大切です。今後とも、皆の心を込めたデタラメの励ましに夢と志をかけて、研究を進めていくつもりです。

諸　記　録

◇平成２１年度入試結果

・教育学部

日程等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程文系	５０				
前期日程理系	２０				
第３年次編入学	１０	２３	２２	6	

・教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース	教育科学専攻	１８				
		臨床教育学専攻	１４				
	教育科学専攻(専修コース)		１０	31	30	9	
	臨床教育学専攻(第2種)		若干名	2	2	0	
博士後期課程臨床教育学専攻(臨床実践指導者養成コース)			4	9	9	2	
博士後期課程編入学			若干名				

(　　)内の数は外国人留学生で内数

◇平成２０年度学位授与件数

（H20.10.1現在）

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	
修士	教育科学専攻	
	臨床教育学専攻	
博士	課程博士	5
	論文博士	2

◇人事異動（H20.4.2～H20.11.1）

○平成20年6月1日付け
浅田　剛正　助教　（臨床実践指導学講座）　採用

○平成20年8月25日付け
[redacted]

○平成20年8月31日付け
[redacted]

○平成20年9月24日付け
楠山　研　　助教　（グローバルCOE関連）　辞職

○平成20年10月1日付け
[redacted]

○平成20年10月16日付け
角野　善宏　教授　（臨床心理実践学講座准教授から昇任）

○平成20年11月1日付け
RUPRECHT MATTIG　助教（グローバルCOE関連）　採用
（ループレヒト・マッティク）

◇寄附金受入

寄附金の名称	寄附目的	寄附者	研究担当者
高見 茂教授（教育学研究科）の研究活動に対する助成	高見 茂教授（教育学研究科）の研究活動に対する助成	有限会社 関西教育孝学	高見　茂　教授
三好曉光記念臨床心理学基金	京都大学大学院教育学研究科における臨床心理学の学術研究交流推進のため	三好曉光氏遺言執行者 立木　康介	伊藤　良子　教授
京都大学教育研究振興財団 短期派遣助成	京都大学教育研究振興財団 短期派遣助成	財団法人 京都大学 教育研究振興財団	齊藤　智　准教授
京都大学教育研究振興財団 短期派遣助成	京都大学教育研究振興財団 短期派遣助成	財団法人 京都大学 教育研究振興財団	岩井　八郎　教授
「３次元仮想空間内での空間表現を用いたコミュニケーション」に対する研究助成	「３次元仮想空間内での空間表現を用いたコミュニケーション」に対する研究助成	財団法人 大川情報通信基金	小島　隆次 グローバルＣＯＥ研究員
問題解決能力育成の認知的研究	楠見 孝教授に対する研究助成	株式会社 ベネッセコーポレーション ベネッセ教育研究開発センター	楠見　孝　教授

◇科学研究費補助金

２０年度

研究種目	研　究　題　目	研究担当者
特定領域研究	仮想空間を利用したガン患者サポートグループの構築	楠見　孝
基盤研究(A)海外	多文化横断ナラティヴ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発	山田　洋子
基盤研究(B)一般	「心の理論」の獲得と実行機能の発達	子安　増生
基盤研究(B)一般	批判的思考の認知的基礎と教育実践	楠見　孝
基盤研究(B)一般	「伝承・習い事」文化における学習様式と生涯学習の現代的課題に関する比較研究	渡邊　洋子
基盤研究(B)一般	近代日本の植民地経験とアイデンティティ形成に関する比較教育文化史的研究	駒込　武
基盤研究(B)一般	教育委員会制度を支える公会計制度の開発とその適用可能性の検証	高見　茂
基盤研究(B)一般	「わざ」の継承に働く「知」の構造を解明する―新たな学習術理の創成に向けて	鈴木　晶子
基盤研究(B)一般	トランスナショナル・エデュケーションに関する総合的国際研究	杉本　均
基盤研究(C)一般	シュタイナー教育とその周辺領域への参与観察による人智学共同体の教育人間学的解明	西平　直
基盤研究(C)一般	ドイツにおける大学改革支援団体による高等教育政策の推進メカニズムに関する研究	金子　勉
基盤研究(C)一般	放送メディア教育の成立と展開	佐藤　卓巳
基盤研究(C)一般	アクション・コントロールにおける言語性作動記憶の役割	齊藤　智
基盤研究(C)一般	リテラシーの育成をめざす評価規準と評価方法の開発	田中　耕治
基盤研究(C)一般	心理臨床場面における対話の構造	桑原　知子
基盤研究(C)一般	スタンリー・カベルと「大人の教育としての哲学」―人文科学の学際・国際的交流研究―	齋藤　直子
基盤研究(C)一般	東アジア諸国・地域における大学入学者選抜制度の比較研究	南部　広孝
若手研究(A)	ヒトを含む霊長類乳児の感覚統合－分化と運動変換に関する比較研究	明和　政子
萌芽研究	医学教育従事者の専門職研修に関する成人教育学的実践研究―教育学専攻者を中心に―	渡邊　洋子
萌芽研究	女子中等学校の文化と教養に関する比較社会史的研究	稲垣　恭子
若手研究(A)	不妊治療経験者の選択と岐路、その支援：多様な親子関係を築く女性と子どもの語りから	安田　裕子
若手研究(B)	カリキュラム評価に活きるスタンダードの設定に関する国際比較調査	西岡加名恵
若手研究(B)	知覚世界を安定化するメカニズムに関する心理物理学的・認知脳科学的検討	廣瀬　信之
若手研究(B)	認識論的メタ認知と批判的思考の関連性に関する文化比較研究	C·F MOISES K
若手研究(B)	科学者の探求手法を体験することで科学的思考を学ぶカリキュラムの検討	中池　竜一
若手研究(B)	共同性と個をめぐる生涯学習論的考察―理論研究とフィールド研究のはざま―	安川由貴子
若手研究(スタートアップ)	中国における学校制度の柔軟性－子どもの多様性に対応する視点から－	楠山　研
若手研究(スタートアップ)	子どもの言語経験にもとづいた小学校英語教育カリキュラムの開発	赤沢　真世
若手研究(スタートアップ)	存在論に立脚した教育学の可能性と限界－ボルノウ教育学の再考を軸に－	井谷　信彦
若手研究(スタートアップ)	高次認知の個人差とワーキングメモリ	大塚　結喜

◇オープンキャンパス2008開催

平成２０年８月７日（木）、８日（金）の両日、「京都大学オープンキャンパス2008」が開催された。

本学部においては、８月７日（木）12時30分から実施し、２５６名の参加者があった。

当日は、矢野智司学部長の歓迎の挨拶、角野善宏准教授の模擬授業、授業担当教員との意見交換、各系の説明と質疑応答が行われ、会場は参加者の熱気にあふれた。また、終日、学生相談員、教員、教務掛担当者が個別相談にあたり、参加者からは多くの相談が寄せられた。

諸　報

◆新任教員・事務員紹介（「　」内は本人の抱負）

[redacted]

～ 編 集 後 記 ～

「ニューズレター第17号」をお届けいたします。ご覧いただきます通り、現在本研究科には、実にたくさんのプロジェクトが走っています。しかもそのそれぞれにおいて若い人たちが中心的な役を担って活躍してくれています。実に嬉しいことです。来年は60周年。本学部の「還暦」祝いです。私たちの学びの場がますます生き生きとした豊かなものとなってゆきますように、心から祈りたいと思います。（T,N）

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長　杉本　均　教授（比較教育政策講座）
委　員　矢野　智司　教授（教育学研究科長・教育学部長）
委　員　西平　直　教授（臨床教育学講座）
委　員　角野　善宏　教授（附属臨床教育実践研究センター）
委　員　千代　進一　事務長
委　員　河合　明美　専門職員（総務掛長）
委　員　西本　幸江　専門職員（教務掛長）

事務担当
教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075（753）3003